

「ゴールデンランバー」

伊坂 幸太郎 著

「あの頃はよかった」という言葉を時折耳にします。何がよかったのか？健康だったのか、お金があったのか。理由は様々です。本書は、「あの頃」は「何がよい」のか、ひとつの形を提示してくれました。

ストーリーは首相暗殺事件に巻き込まれた男性が、仙台の街を舞台に、権力が敷いた監視網から逃げ、戦うというものです。タイトルの「ゴールデンランバー」はバツクに流れるビートルズの曲で、事件はケネディ大統領暗殺をモチーフにしています。主人公は、ハードボイルドなスーパーマンではなく、常識的な「普通の人」です。武器は、「人との信頼関係」。こう書いてしまうと、斬新さも感じられなくなってしまうのですが、とても面白く、500ページを超える長編ながらも一気に読み通せました。

作品の「社会があなたを犯罪者と決めつけても、無実を信じてくれる人はいますか？その人とは、いつ、どんな時を過ごしましたか？その頃、あなたは幸せだったはず」という問いかけが、自分の「あの頃」について考えるきっかけとなりました。主人公にとっては両親と過ごした幼い頃と、友人との学生時代。その頃の信頼関係が、心理的にも現実的にも主人公の戦いを支えます。私にとつての「あの頃」は何時頃だったのか考えた結果、それは「今」でありたいと。今一緒にいる人、家族であったり仲間であったり・・・を信頼できると言い切れる自分でありたいと。

達 紀



新潮社

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞